

第4回日本中医学会学術総会

全体の見どころ

第4回日本中医学会会頭 西本 隆

第4回日本中医学会学術総会が今年も9月13-14日、タワーホール船堀で開催されます。今回の特徴は、なんといっても、会頭の私をはじめとして準備委員全員が関西のメンバーに任されたことです。関西には、「かやくめし」という言葉があります。全国的には「まぜご飯」というのでしょうか、いろんな具がまざってそれぞれの味を損わず、全体としても調和のとれた味を作り上げている、今の関西の漢方の有りようは、まさにこの「かやく飯」で表現されるような、多様な価値観の包括にあると思います。

今、東アジア伝統医学を俯瞰するとき、そこには、さまざまな主張、方法論があり、それらは、過去の歴史や地域などを多元軸として複雑に絡み合っています。その中であって我々が目指すべきものは、それらを単純に統一しようなどという短絡的志向ではなく、まさに「かやくめし」のようにお互いを認め合い、個々の良さを引き出しながら、東アジア伝統医学を前に進めていくことであると、私は信じています。

今回のプログラムですが、まず、一見混沌とした関西の漢方界のなかで「中医学」がどのように脈動を続けてきているのか、を、シンポジウム「かつて、なにわにこんな中医学があった」で検証します。また、我々に突きつけられた高齢化社会において、「認知症」「アンチエイジング」「体質医学」「リウマチ」という4つの視点から、招待講演、特別講演、シンポジウムの企画を立てました。また、針灸治療の科学的解明と実技の融合や穴性問題シンポジウムなど、針灸の分野でも up to date な話題を盛り込んでいます。

さらに、一般公開講座では、「中医学で美しく健やかに」という魅力的なテーマで、まさにそれを体現されている3人の講師にお話をいただきます。

これを書きながら、私も期待にわくわくしてきました。

それでは、9月に大勢の皆さまにお会いできることを楽しみにしております。

「認知症ケアの最前線」

日本大学工学部・電気電子工学科 次世代工学技術研究センター

日本大学医学部・脳神経外科（兼任）

酒谷 薫

少子高齢化社会の進展とともに認知症など高齢者特有の精神神経疾患が急増しているが、これらに対する薬物療法の効果は限られており、また副作用も少なくない。特にアルツハイマー病新薬の治験の失敗が続いており、製薬メーカは認知症に対する新薬の開発に対して消極的になってきている。このような状況の中で、認知症に対する「非薬物療法」の重要性が再認識されている。本シンポジウムでは、認知症に対する非薬物療法の中で科学的な実証が行われているセラピー（鍼灸、化粧療法、ユマニチュード、運動療法）について各分野の専門家に報告していただき、中医学の治療との接点について議論する。

「かつて、なにわにこんな漢方があった～中島随象の遺産」

田中医院 田中 秀一

日本漢方の代表的存在、大塚敬節先生の、大塚敬節著作集は、全8巻有り、別冊に、東洋医学史、日本医学史が収められている。日本医学史の最終行は、(明治)二十七年には漢方最後の巨星浅田宗伯が倒れ、ここに漢方医学の伝統は殆ど絶滅の悲運に陥ったのである。という、嘆きにも似た記述で終わる。

そして、漢方再生の担い手は、昭和初期に、古方派、湯本求真～奥田謙蔵。後世方派、森道伯。昭和10年代以降、古方派、大塚敬節。後世方派、矢数道明と、引き継がれるが、関西には、京都に細野史郎。大阪に森田幸門。そして神戸に、矢数格から一貫堂医学を学んだ、中島随象の中島漢方舎が有った。大塚敬節 1900年生。矢数道明 1915年生。中島随象 1898年生のほば、同世代人で有る。

この中島一貫堂医学に、1965年から、1980年代に掛けて、伊藤良、山本巖、松本克彦、田川和光の個性派が集い、

この時期に、神戸中医研から、中医学の訳出が意欲的に相次いで出版される中心になって行く。

熱い時代の潮流を、この秋、船堀で、再現する。

「アンチエイジングと中医学」

日本赤十字社和歌山医療センター 心療内科 西田 慎二

いつの時代も人間の夢は「不老長寿」にあります。秦の始皇帝も不老長寿の秘薬を求め、徐福を蓬莱（日本）に派遣したという伝説もあります。もちろん、たんに長生きすれば良いというだけではなく、健康であるということが必要です。そのためには西洋医学的な治療だけではなく、中医学のさまざまな手法が役立ちます。

そこでこのシンポジウムでは、4名のシンポジストにアンチエイジングに対する中医学の可能性について、講演と議論をお願いしました。加島先生には、エイジングの要である腎の概念について、そして臨床応用については、西森先生には主に湯液の視点から、江川先生には主に鍼灸の視点から、最後に萩原先生には、動物実験における漢方薬の抗加齢作用について、それぞれの先生にお話しをしていただきます。

4名のシンポジストの先生方の発表から、アンチエイジングに対して中医学がどのようなことが可能で、また不可能であるかなどについてまとめることができればと思います。

「リウマチと中医学」

大阪大学大学院医学系研究科、漢方医学寄附講座 萩原 圭祐

シンポジウム④では、関節リウマチを取り上げていきます。

伝統医学における関節症状に対する考え方も、様々な歴史的変遷があります。まず、山本先生には、伝統医学における関節症状は、どのように考えられてきたのかを、さまざまな古典の記載をもとに検討してもらおう予定です。限られた時間の中で、中国の古典や、江戸時代の臨床家の記録まで、分かりやすく示して頂く予定です。

関節リウマチの治療において、その病態を、どのように弁証し、どの臓腑に注目するかは非常に難しい問題です。田中先生には、ご自身の臨床経験をもとに、従来云われている弁証が、当てはまった場合や、当てはまらなかった場合に、どのようにアプローチしていったかを、分かりやすくお話しして頂く予定です。

現在、関節の治療戦略は、劇的なパラダイムシフトが起こっています。生物製剤といわれるサイトカインを標的として治療が主流となった今、ガイドラインを、十分に踏まえていく必要があります。最後は、私、萩原が、大阪大学で取り組んでいる、脾に注目した融合治療をもとに、伝統医学の新たな可能性を論じていきます。

学会最後のシンポジウムですが、多数の方の来場と、活発な議論を期待します。

「穴性問題について」期待するところ

九州看護福祉大学鍼灸スポーツ学科 篠原 昭二

中医鍼灸では、配穴において穴性(あるいは穴位効能：漢方薬の薬味が有する薬性に類似した、経穴刺激で発揮するあるいは、期待できる主治作用)はごく常識的に取り扱われているものと考えられる。しかし、中国においても穴性に関する問題は確立されて居らず、議論が継続されている。そこで、当シンポジウムにおいて、穴性に関する問題を俎上において議論することを企画した。

まず、会員等を対象としたアンケート調査によって、穴性に関する認識や考え方、利用頻度等、具体的な運用の実態について調査した内容を瀬尾港二先生（アキュサリユート高輪院長）に「穴性アンケート調査報告」と題して紹介頂く予定である。日本の臨床家の穴性に関する意識調査についても織り込まれた内容であり、その実態に注目したいところである。

次に、中医臨床編集長である井ノ上匠氏（東洋学術出版社社長）より、「穴性をめぐる中国の動向」と題して、穴性問題に関する概略を解説頂く予定である。井ノ上氏は中医臨床誌上において穴性に関する企画も組まれており、本問題に関して非常に詳細な分析もされている。また、臨床家とは違った視点でこの問題について意見を頂くことは、シンポジウムにおいても非常に楽しみな視点であると考えた次第である。

3人目のシンポジストは、金子朝彦先生（さくら堂治療院院長）で、「穴性についての考察」と題して、私論を展開頂く予定である。金子先生は中医臨床誌上において独自の穴性論も展開されており、新たな一歩を開く内容であると思われる。

シンポジウムは、10月14日(日)の午前9:20-10:30までの70分と短い時間ではあるが、興味の尽きない話題と問題点を包含したシンポジウムになると思われる。なお、指定発言として、東北大学の関隆志先生、愛媛中医研の越智富夫先生、東洋学術出版社の山本勝司顧問にもご意見を頂く予定である。

今回のシンポジウムで結論が出せる様な浅薄な内容ではないが、今後の学会としての研究の方向性を示すことができれば幸いである。

一般公開講座 の注目ポイント

「中医学で美しく健やかに～自宅でできるセルフケア」

東洋堂土方医院 土方 康世

中医学と密接な関係のある、薬膳、鍼灸は、良いと分かっているにもかかわらずなかなか敷居が高く、結局いつまでもなじめない分野です。

本日は、大阪漢方医学振興財団理事長の河田加代子先生に、病気のみならず未病の段階で、東洋医学の自然の摂理に基づき、自身に具わる自然治癒力を引き出す方法や、中医学に基づいた改善法を教えてください。そして、漢方治療と関係の深い、高名なお二人の薬膳、鍼灸のスペシャリスト、国際薬膳食育学会理事長の板倉啓子先生、まり鍼灸院院長の中村真理先生に、分かりやすく、自宅で出来るセルフケアのお話をして頂きます。

そしてこれを機会に、漢方治療、薬膳、鍼灸に親しみ、皆様の健康維持のツールとして、楽しみながらご利用頂けると幸甚です。